



馬耳東風

個性色の濃い自己実現を求めて地方移住が注目されている。メディアの注目もある。過密を避けたいいわゆる田舎暮らしだ。コロナ環境からの脱出で一種のブームを生み出したようにも見える。人口減少を食い止め、何とか活性化しなければならない地方の必死の取組がある。教育現場でも取り入れられ、子どもの単身留学も生まれている。デジタル化で地方創生を促す動きも出てきた。農山漁村を目指し動植物に関心を持ち自ら土を耕す生活にあこがれる人々。あるいは、特定の技術を携えて暮らしを求める人々。樹木を愛し育てながら自らの手で自らの食べ物を栽培する生活が輝いて見える。目指すものを持ち、定年後に限らない生活設計で土の匂いをかぎ、動物を迎えて暮らす人々に接する機会が増えてきた。

テレビで人気番組の「ポツンと一軒家」は、所以を尋ね人情の機微に触れる楽しみがある。移住者の多くは小さな高齢者集落に飲み込まれ地域共同体の一員として組み込まれて行く。自らの専門職を展開する移住者の存在もまたうれしい。新しい考え方や新しい知識を持ち込んでくれる。調和された文化が育つ。2時間かけて都会に通勤しながら定年を迎えて山村で暮らしはじめ、夫婦で作業着をまとい動物を飼う。畜舎は斜面をうまく使い、ヤギの好きな高操の地に高床を張り見下ろす展望は見事だ。

コロナ禍の折、若い女性が都内の会社に就職した。仕事の多くがリモートテレワークで、これならと思い切って奥多摩に移住した。奥多摩は東京といいながらとにかく

く山岳地帯で坂が多く崖があちこちにある。生活に情緒を加えようとヤギをお迎えした。仕事は雑誌のライターなので編集して本社に送ればよい。したがって勤務時間に多少の融通は効くのだろう。飼いはじめた子ヤギをリードで繋いでおいた。ところが急に姿が見えないので逃げ出したかと繋いだ所へ行って驚いた。崖下へ落ちて首を吊ったまま宙にぶら下がってぐったりしていた。まさかの崖落ちである。大急ぎで救出したがぐったりしたままだ。車に乗せ動物病院に担ぎ込み、酸素吸入や救急処置でチアノーゼが消えるのに時間がかかったが、何とか一命をとりとめ今は元気に走りまわっている。先日、イヌに耳を咬まれてぶらさがった皮膚を縫いこんで傷が治ったばかりだった。高い所が得意のヤギでも繋ぐと山地の生活は慣れるまでが大変である。もうすでに、雌なのでご近所からは乳が搾れたら欲しいといわれている。これからのお付き合いが楽しみでもある。ところでヤギはフリーマージンが多いので導入時の確かめがいささか気になっている。移住生活は、〇〇+農業？が多く、先ず鎌の使い方や草取りの方法から学ぶ必要がある。野生動物と共生しながら在来植物の種類から特徴まで、自分の目で確かめ季節の移ろいととも覚えてゆく。土地の人でさえ固有の名前を知らないケースは多い。昆虫に刺されたり植物にかぶれたりするのは当たり前だ。しかしそれもまた生活リズムの一つで、おかれた場をとおして交流がはじまる。「おはよう、おめでとう」の新年の出会いが楽しみでもあるのだ。

(柏)